

ちまちだだったが、六、七名のことがいちばん多く、私は終始一人だったので、ちょうど良い人数だった。

絵本は私が十冊ほど持っていき、そのなかから誰かが選んだものを読む。それとは別に、子どもたちが自分の本や施設の本棚の本を持ってくることもあった。たいていは絵本を選んだ子が私の膝に座って、聞きたい子が数人、周りを囲んで聞いている。他の子どもたちは、絵本を一人でめくっていたり、用意してある画用紙やクレヨンで絵を描くなど、バラバラに過ごしていた。

### 乱暴なR君

二ヵ月ほどたったころ、R君という男の子がやってきた。この子は二年生だったが、一年生にしても小さいほど小柄だった（入園するまで、十分な栄養を摂っていなかったのだと思う）。R君はひどく乱暴で、必ず誰かが大泣きするはめになった。絵本を読みはじめると、私の膝に座っている子を容赦なく引きずり下ろして、自分が座る。ここには、家庭で膝に抱かれて絵本を読んでもらった経験のある子どもは、ほばいない。そのためにもこの誰だかよく分からない私の膝でも、人気があって、よく取り合いが起こった。順番という暗黙の了解があったのだが、R君は歯牙にもかけなかった。

「順番だから待っててね」と言いかけると、いちおう肯くののだが、三分もしないうちに大暴れが始まる。よく顔を

出してくれる五年生の女子が「Rもそのうち分かるからね。ちょっとのあいだから、がまんしな」と、非常に聡明に、泣いている子をなぐさめてくれたこともあった。

R君は、必ず来る熱心なメンバーだった。乱暴には私も困り果てていたのだが、少しずつ少しずつケンカは減っていった。その理由のひとつは、R君が絵本作りに熱中するようになったためだ。絵本を読んでいるうちに「あたしも絵本を作ろっかな」と言い出す子が出てきて、自然に絵本作りが始まっていたのだ。

### 絵本作り

B4の白い紙二枚とカラー紙一枚を真ん中で折って、ホッチキスで留めて、絵本の台にすることが多かった。絵を描くのが得意ではない子もいたので、カラージュも始めた。子ども用の雑誌を中心に古雑誌を持ちこんだが、犬や猫をたくさん掲載したペット雑誌が一番の貴重品だった。

一、二年生が物語を仕上げるには、少し手助けを必要とする。例えば、ウサギの絵を貼って「ウサギの絵本を作る」と言う子がいたとする。そのときに例えば「うんうん、名前は何にする?」と問いかける。

『みきちゃん』だよ。あつ、ケーキだ。ケーキ、いっぱい貼ろうって」

「わゝ、おいしそうだね。ケーキ食べた後はどうするの? ひるね?」こういう質問を重ねていくと、それに答える形